

# 生産者と和歌山大生本音で対話

J Aわかやまが和歌山大学で開く2022年度寄付講義「食と農のこれからを考える」で、最終回に現役農家が登壇した。学生からの質問に現場の生の声で答え、農業の実像を伝えた。

同講義は18年度から続く。後期日程の教養科目で全15回。J Aの講義が卒業単位として大学の課程に毎年組み込まれるのは珍しい。

最終回は学生135人の他、J A役員や一般聴講生も受講した。「農業者たちと語る」と題し、J Aからキャベツ・白菜(軟弱)連絡協議

## 農の実像伝えたい

会長の笹田正三さん(73)、元幼稚園教諭の西原和哉さん(49)、白浜町の遠藤賢嗣さん(36)が登壇。3人も園芸農家で、転職、退職して就農した。

「家族の反対はなかったのか」「農業は大変ではないのか」といった率直な質問に、笹田さんは「郵便局を定年退職してキャベツ、ハクサイを作りだした。家族には喜ばれ、充実している。肝心なのは自分が楽しむかどうか」と語った。

西原さんは「就農して5年目。人生を仕事一つで終わら

## J Aわかやま寄付講義



学生の質問に答える(右から)西原さん、笹田さん、遠藤さん(和歌山市で)

せたくなかった。天候に左右されやすく大変だが、野菜作りをやめたいと考えたことは

ない」と話し、就農4年目の遠藤さんは「農家は経営者。収入保険制度や国の支援事業

でリスク分散している。農業体験事業も重視して、ファンづくりにもつなげていきたい」と答えた。

J Aの森博克専務は「日本の食と農を守っていかねばならない。持続可能な農業の実現へ、ぜひ国産農産物を選んでほしい」と呼びかけた。学生は「話を聞いてよかった。消費者の立場でできることを実践したい」と話した。

同大学食農総合教育研究センター長の岸上光克教授は「本音の対話で受講生の考え方に変化が出たと思う。食と農の未来をつなぐ場となるよう、充実した講義を展開していきたい」と強調する。

(わかやま)